言語社会研究科　博士審査要旨

論 文 提 出 者　　ダルハン
論　文　題　目　　祭祀儀礼から見るホルチンのボームリグル
　　―東モンゴルのシャマニズム研究―
論文審査委員　　松永　正義教授、吉川　良和教授、坂内　徳明教授

１．本論文の構成

ダルハン氏の博士学位請求論文『祭祀儀礼から見るホルチンのボームリグル――東モンゴルのシャマニズム研究――』は、東モンゴルホルチン地方におけるシャマニズムの記述的研究である。本論文は以下の各章から構成される。

はじめに

第１章 守護霊憑依儀式

第２章 祭祀儀礼

2-1　ボンブル・タヒホ（ボンブル祭祀）
2-2　ロス・タヒホ（ロス祭祀）
2-3　テングリ・タヒホ（テングリ祭祀）

第３章　治療儀式

第４章　シャマンへの道

4-1　シャマンになる素質
4-2　シャマンになるための修行
4-3　シャマンの誕生
4-4　シャマンの呼称

第５章　シャマンの装束と用具

5-1　装束
　5-1-1　エレンデル（eren del 花柄の服）
　5-1-2　帽子
　5-1-3　青銅鏡のベルト
5-2　用具

5-2-1　太鼓と撥
5-2-2　ジダ（刀）
5-2-3　ソハイ・タシグル（ソハイ鞭）
5-2-4　青銅鏡
5-3　その他の装束と用具
第６章　シャマニズム的世界像
6-1　シャマンの死後の世界とスリル木
6-1-1　シャマンの死後の世界
6-1-2　スリル木
6-2　テングリと地上の諸主たち
6-2-1　テングリ
6-2-2　地上の諸主たち
6-3　オングド（偶像）

第７章　シャマンの社会的機能
7-1　祭祀活動
7-2　病気治療
7-3　卜占
7-4　他の社会的機能

おわりに

参考文献

２．本論文の概要

本論文は東モンゴル、ホルチン地方のシャマニズムの実態を、多くの現地調査に基づき、記述したものである。ダルハン氏は現地調査で得たビデオ、写真、録音テープなどによって、各種の儀礼の様子を詳細に記述すると共に、儀礼中に歌われる歌を文字化して、これを日本語に訳し、詳細な注を付し、また聞き取り調査によって得られた知見をもとに、シャマンたちの世界観や、シャマンになるための過程などを構成、記述している。なお、シャマニズムとはアルタイ系諸民族の原始信仰を総称して言うものであり、そこからまた世界の原始信仰一般をも指すが、ホルチン地方ではそれは一般にボームリグル（ボーの信仰。ボーは男性シャマン。女性シャマンはオダガン）と呼ばれる。

第一章は、セリンチン・ボーによる守護霊憑依儀式の様子を記述したものである。儀式の次第と共に、儀式中に歌われた１４の神歌が記述されている。１４の歌は、チベット仏教の神々への呼びかけから始まり、テングリ、ジヤチ、ナイナイ・ボグダといったモンゴル固有の神々、シャマンの霊、守護霊への呼びかけを経て、守護霊が憑依してからはこれに呼びかけ、更に霊が去ってからこれを送る歌までの流れを持っており、ボームリグルの背景にある世界構造がかいま見える。この儀式は、長らく憑依させなかった守護霊に子孫たちが久しぶりで会うために行われたもので、併せて治療の儀式が行われた。

第二章では、セリンチン・ボーによるボンブル祭祀、セリンチン・ボーによるロス祭祀、ラシポンソグ・セラホンドンボーによるテングリ祭祀の３つの祭祀の様子、そこで歌われた歌、犠牲の上げかたなどが記述される。これらの儀式は家運の向上等を祈願して、ボンブル、ロス、テングリといった神を祀るもので、ボーによって行われたが、霊の憑依は行わない。

第三章では、テンリャン・オドガンによって行われた病気治療儀式を記述する。テンリャン・オドガンは前日に守護霊を憑依させて、病気の診断を行っており、この日は患者に乗り移ったイタチの霊を追い払う儀式を行ったのである。

第四章では、多くのシャマンへの聞き取り調査による事例の記述を通して、どのようにシャマンが生まれるかが記述される。一般に守護霊の作用で身体または精神に異常を来すことで、シャマンとしての素質が認識されること、しかし多くの場合は素質はあっても修行しないとシャマンにはなれないことが述べられ、また修行のやり方が具体例に基づき記述される。

第五章では、シャマンの装束、用具が紹介される。

第六章では、シャマンの死後の世界、シャマンの死体を解体して掛けるスリル木、テングリおよび他の神々などの概念、およびオングド（偶像）について記述される。中でオングドに関する記述がやや詳しい。

第七章では、シャマンの社会的機能として、祭祀、病気治療、卜占などが挙げられる。

３．本論文の成果と問題点

本論文の功績は第一に、ホルチン地方というこれまでほとんど調査が行われてこなかった地域のシャマニズムの実態を、詳細、入念に記述したことが挙げられる。また、内モンゴルにおけるシャマニズムは、チベット仏教の浸透により廃れ、変形していく傾向にあったが、中華人民共和国となってからは、更に封建的迷信として否定され、公にすることをはばかられる存在だった。八〇年代に入ってからやや復活の兆しがあるものの、現在記述しておかなければ遠からず見ることができなくなるだろう部分を含むという意味でも、この記述は意義のあるものと考えられる。

第二に、現地調査における記録は周到で、例えば本論文に掲載された写真から、シャマンの衣装の色彩配置が、五行思想に影響された漢民族の色彩配置とまったく異なることがわかるなど、本論文に記述された以外の情報を引き出すことが可能である。こうした記録もまた貴重なものと言える。

第三に、神歌の録音を文字に起こし、これを翻訳、注を附しているが、その扱いも入念で、苦労の多い作業であったと察せられる。歌は方言で歌われ、即興的に歌われる部分を含むから、これを記述することは、儀式に精通し、かつ当地の方言にも精通したものにしか行えない作業であろう。

しかしながら本論文にはいくつかの問題もある。第一に、ホルチン地方および儀式の行われた村の人口、宗教、地理、歴史、エスニーの分布、住民の生業などの地誌的データの記述がなかったことが惜しまれる。こうしたデータは、シャマニズムの背景を理解する上で不可欠のものであったと思われる。

第二に、儀礼の記述は生彩に富むものの、第六章のシャマニズム的世界観の記述はやや物足りない。シャマンたちからの聞き取りから得られた知見に記述を限ったことに起因するものだろうが、この部分は文献や他地域の調査などからわかることも多いと思われるので、もう少し広い展望のもとで論じられることが望ましかった。

第三に、チベット仏教の浸透がしばしば言及されるが、そうしたシャマニズム以外の民間信仰との関わりも知りたいところである。もっともチベット仏教との関係を探るには、同じくチベット仏教の影響を深く受けた満州のシャマニズム（これは多くの研究がある）などとの比較から入るのが筋道かもしれない。

最後にホルチン方言の単語の意味の簡単な一覧表を付すなど、読者への配慮もあればよかったと思われる。

しかしながらこうした問題についてはダルハン氏も十分自覚しており、他地域における先行研究を安易に参照することを避け、まずホルチンにおける儀礼の実態をそれとして取り出すことで、他地域との比較の基礎を作ることに本論文の目的があったわけで、その当初の目的は十分に達成されているものと思われる。

以上のことから審査委員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

４．結論

２００６年１月３１日、学位請求論文提出者ダルハン氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第８条第１項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文『祭祀儀礼から見るホルチンのボームリグル――東モンゴルのシャマニズム研究――』に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、ダルハン氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査委員一同は、ダルハン氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。

平成 18（2006）年 2 月 8 日

最終試験委員　　松永正義　　吉川良和　　坂内徳明